

## 「メキシコ六八」五輪

## —その選出の理由—

## イサミ・ロメロ

## ●はじめに

一九六八年のメキシコ・シテイ五輪（以下、「メキシコ六八」）は、近代五輪史上初めて「途上国」が主催した大会である。しかもスペイン語圏の国において最初に開催された五輪であると同時に、中南米で初めて行われた五輪でもある。

以前、いくつかの「途上国」がサッカーW杯を開催したことはあったが、「メキシコ六八」のように世界各国の選手が集まる国際大会の開催は前例がなかった。

厳密にいうと、当時のメキシコは「途上国」ではあったものの、現在のブラジルのような「新興国」のラベルの方が相応しい。第二次世界大戦後、中南米の多くの国は輸入代替工業モデルを通じて経済の発展を試みていた。そのなかでもメキシコを支配していた制度的革命党（PRI）政権の経済政策

は目覚ましい高度成長を実現させていた。そう考えると、メキシコ・シテイの選出は決して想定外のものではなかった。

ちなみにメキシコの特別なバツクグラウンドに加えて、「メキシコ六八」は、「五輪は政治と無関係であるべき」という国際五輪委員会（IOC）の美名が無視された大会でも有名である。まず大会前にアパルトヘイト政策を実施していた南アフリカの参加にアフリカ諸国が出場ボイコットを発表した結果、IOCは南ア代表団の参加を認めないことを決定した。また男子二〇〇メートルの表彰式の時に、優勝した米代表トミー・スミスと三位のジョン・カロースが黒手袋をはめて片手を高く突き上げ、母国の人種差別問題に不満をぶつけた。さらにソ連からの独自路線を支持する「二〇〇〇語宣

言」に署名したチェコスロバキアの女子体操選手ヴェラ・チャフラフスカは、危険を感じて身を隠しながら、最終的に宿敵ソ連を下して四つの金メダルを獲得した。

とはいえ、スポーツの観点からみると、「メキシコ六八」は成功した大会であったといえる。海抜二〇〇〇メートルの高地で行われたことから陸上競技では多数の世界記録が誕生した。さらに、五輪運動に新たな要素が取り入れられた。まず大会組織委員会の要望で史上初めて女性が聖火リレーの最終ランナーを務めることになった。またドーピング検査が採用された最初の大会でもある。さらにIOCが今まで重視してこなかった「文化」が取り上げられた。大会組織委員会の会長を務めた建築家ベドロ・ラミレスはバスケットの提案で約一年間を通じて「文化五輪」

が開催された。ここでは各国の芸術家が自国の文化を紹介するためメキシコ・シテイに集結した。その結果、一般競技では輝けない多くの「途上国」が活躍の場を得ることができた。

ところが、メキシコ国内において自国開催の五輪への評価はネガティブである。メキシコ選手団が九個のメダル（金メダル三個、銀メダル三個、銅メダル三個）を獲得したものの（メキシコ・スポーツ史上最高の成績）、その「栄光」を評価する声は少ない。その背景には、サッカーW杯とは異なり、メキシコ人が五輪をエリート層の「娯楽」として見ていたことが関連しているが、五輪開催が国内経済に及ぼした悪影響を今でも不満に思っている人が多いことも関係している。事実、一九七〇年代に起きた経済危機の要因が五輪開催にあったとの見解を政府も示している。

しかし、「メキシコ六八」が評価されていない最大の理由は、やはり「トラテロルコ虐殺」と呼ばれる、政府による反五輪運動への弾圧の存在である。メキシコでは一九六〇年後半、五輪開催に反対する学生運動が全国規模で展開さ

れた。これに対して、グスタボ・ディアスオルガス大統領領（一九六四〜七〇年）は、五輪開催直前に反対デモを終わらせるべく学生運動への弾圧を強めた。その結果、一九六八年一〇月二日、市内中心部のトラテロルコ広場において、集まっていた一万人の学生と軍隊との間で衝突が起きた。この衝突による死者数は、政府の公式発表では三五〇人とされているが、それ以上だと考えられている。結局、多くの犠牲者があったにもかかわらず、IOCは予定どおり五輪開催の日程を進めた。これが多くのメキシコ人にとって今でも許せない点である。この意味から、「メキシコ六八」を語る時にはどうしても「トラテロルコ虐殺」を思い出す人が多く、自国での五輪開催の「栄光」に影を落としている。

本稿では、このような従来の議論から距離を置き、「トラテロルコ虐殺」には焦点を当てず、あまり取り上げられていない点を紹介したい。それは「途上国」開催の五輪を考える際に重要である、IOCは何故メキシコのような「途上国」の都市を選出したのか、という点である。

## ●メキシコのスポーツの発展

メキシコでは一九世紀末からスポーツが行われるようになるが、当時の政府はその振興に無関心であり、スポーツは上流階層の娯楽にとどまっていた。これに加えて、メキシコ革命（一九一〇〜一七年）の勃発の影響で国全体が混乱状態になり、スポーツを広める余裕が政府にはなかった。しかし、オブロン政権（一九二〇〜二四年）の教育改革によって体育の授業が学校のカリキュラムに取り入れられると、スポーツの普及が進み、次第にスポーツを振興する団体が結成され、その幹部が国際大会の開催に関心をみせ始めるようになった。一九二三年には、第三代IOC会長（一九二五〜四二年）のアンリ・ド・バイエラトゥールがメキシコを訪問した。ベルギー出身の同氏は、メキシコが中南米のスポーツの普及に貢献することを要望した。これを受けて、メキシコ五輪協会（COM）が創立され、一九二四年には、パリ五輪にメキシコ代表団が参加した。そして二年後には、メキシコ・シテイにおいてCOMが第一回中米カリブ海競技大会を開催した。ただその後、第二次世界大戦の影響

で米州地域においてスポーツ大会は中断されることになる。

## ●五輪への道

大戦の終結後、COMの幹部は五輪開催の夢を描き始め、一九五六年大会へのメキシコ・シテイの立候補を決断した。しかし、一九四九年四月にローマで開催されたIOC総会では、一〇都市のうちメキシコ・シテイは五位に終わる。それにもかかわらず、国際大会の開催に対する幹部の意欲は消えなかった。一九五四年には、第七回中米カリブ競技大会をメキシコ・シテイで開催し、翌年には同じ都市で第二回パンアメリカン大会を行った。そして一九五五年六月、パリのIOC総会で一九六〇年五輪の開催都市にメキシコ・シテイは立候補するが、再び選出には至らなかった。

ちなみに、スポーツの観点からみると、当時のメキシコは現在の中国のような「スポーツ大国」ではなかった。また球技における現在のブラジルのようなプレゼンスを持つていなかった。メキシコのスポーツの発展は、サッカーとマインナー・スポーツを除けば依然未熟であった。COMはスポーツの

普及よりも、単に五輪を開催したかったといえる。

どうしてメキシコ・シテイは、それまで五輪開催都市に選出されなかったのだろうか。その最大の理由はメキシコ政府の支援がなかったからである。事実、COMは、ルイス・コルティネス政権（一九五二〜五八年）の支援がなかったことから一九六四年大会の開催都市の立候補を断念した。だが、続くロペス・マテオス政権（一九五八〜六四年）の発足で状況は大きく変わる。新しい大統領はスポーツの普及に関心があり、五輪の開催が、新政権の柱であった積極外交に貢献すると考えていた。政府の全面的な支援を受けて、ヘスス・クラークCOM会長は一九六八年五輪への立候補の準備を進めたが、当時のIOC委員がメキシコ・シテイを支持する保証はどこにもなかった。その時に立候補したのは四つの都市（メキシコ・シテイ、デトロイト、リオン、ブエノスアイレス）であった。しかし国外のメディアは、メキシコ・シテイが高地であり公害問題を抱えていることに加えて、重要な国際大会を開催したことがないメキシコのような「途上国」は

五輪を開催できないと指摘し、西ドイツのバーデン＝バーデンで開催された第六〇回IOC総会では（一九六三年一〇月）デトロイトが選ばれると予想した。

それにもかかわらず、メキシコ・シテイの招致委員会は地道に誘致活動を続けた。特にアフリカ、アジア、社会主義圏の国々に対して積極的なロビー活動を行った。また、五輪競技場をはじめとする多くのスポーツ施設が既に存在している点を主張し、不足している施設の建設は開催日までに間に合うことを約束した。そして、古代アステカやマヤ文明の銅像をバーデン＝バーデン会場まで運び、メキシコが「近代」と「エキゾチック」が共存する国であることをアピールした。結局、メキシコ・シテイは一回目の投票で過半数以上の票を集め、ついに五輪開催都市に選出された。しかも宿敵デトロイトの二倍もの票を獲得した。

## ●メキシコ・シテイの選出の理由

五輪の開催地を選ぶ時、IOC委員の投票は基本的に公にはされない。しかもIOCは過去の総会の資料を公開しない方針である。

その意味で、開催地の選出は常にミステリーである。どうして先進国の都市であるデトロイトやリオンではなく、のんびりとして責任感に欠ける「途上国」である「マニャーナ（明日）の国」メキシコの首都が選ばれたのだろうか。

当時の放送技術の発展がひとつの鍵かもしれない。一九六四年の東京五輪でも示されたように、衛星放送を通じてどのような場所からでも五輪を生放送できる技術がすでに存在していた。しかも五輪の放送権を握っていた米国のテレビ会社にとって、時差問題のないメキシコ・シテイは都合のよい開催都市であった。票の買収の可能性も否定できないが、IOC委員がメキシコ・シテイを魅力的な開催都市だと感じたからこそ、票を投じたと考えるのが妥当であろう。以下、メキシコ・シテイの勝利を説明する五つの要因を紹介したい。

第一の要因は、米国出身の五代IOC会長（一九五二―七二年）アベリー・ブランデージの存在である。ブランデージはデトロイトに票を投じたとされるが、メキシコ・シテイの立候補を妨害するような行為を行わなかった。むしろ、ブランデージは以前から「途上国」

の五輪開催に賛成であった。しかもブランデージとクラークCOM会長は昔から親しい関係を維持していた。両氏はパンアメリカンスポーツ機構の成立以降、米州におけるスポーツの普及に尽力していた。その観点からみても、IOC会長はメキシコ・シテイでの五輪開催に好意的だったと考えられる。

第二の要因は、当時IOCの内部で起きていた変化である。第二次世界大戦後、多くのIOC委員は伝統的な欧米の都市ではなく、新たな場所で五輪を開催してもよいと考えていた。これを象徴するのがメルボルンと東京の五輪開催である。おそらくメキシコ・シテイの選出の場合も、何人かのIOC委員は、同市を選ぶことにより「第三世界」における五輪運動を拡大できると期待したのであろう。

インドネシアは政府の方針により、台湾とイスラエルの参加を認めなかった。これは政治とスポーツを切り離すIOCの方針に反するものであった。結局、IOCとインドネシアとの間の溝が埋められなまま、第六〇回IOC総会が開催された。アフリカやアジアの「途上国」のなかでは、インドネシアにシンパシーを持つ国が多く、デトロイトやリオンが選出された場合、IOCへの不満が増大する可能性が高かった。したがって、この問題を避けるために、ガス抜きとして何人かのIOC委員は「途上国」の開催都市の選出が望ましいと考えたのだから。これがメキシコ・シテイに票が集まる要因となった。

第三の要因は、一九六三年一月にインドネシアで開催予定だった新興国競技大会(GANEFO)の脅威である。GANEFOは、一九六三年四月にIOC加盟資格が停止されたインドネシアの反IOC運動の象徴であった。そのきっかけは、一九六二年のジャカルタで開催されたアジア大会に遡る。

第四の要因は冷戦である。一九五二年以降、ソ連が本格的に五輪に参加していた。ソ連にとって五輪は米国の戦いの場であり、リオンまたはデトロイトが開催都市になるのを基本的に歓迎していなかった。また一九六一年のベルリン危機後、米仏が自国開催の大会に参加する東ドイツ選手にビザを与えない方針を取ったことに、ソ連と社会主義陣営は不満を表明していた。その結果、多くの社会

主義の国と国交を維持していたメキシコの首都が望ましかったのである。おそらく親ソ連のIOC委員は、この理由からメキシコ・シテイに投票したと考えられる。もちろん、この状況を米国側は十分に理解していた。したがって米政府はデトロイトを支持したものの、メキシコ・シテイの立候補を妨害することはしなかった。当時、社会主義陣営が不満なく参加できるのは、同市であることを十分に理解していたのだろう。

最後の要因は戦後の脱植民地運動である。当時、日欧米から独立した国々がIOCに加盟した。彼らは「途上国」であるメキシコにシンパシーを抱いていた。ここで興味深いのはブエノスアイレスではなくメキシコ・シテイに票が集まったことである。その理由は、アルゼンチンの国内問題が関係している。当時のアルゼンチンは政治的不安定、高いインフレ率、軍事政権などの点で、中南米のネガティブなステレオタイプの特徴であった。これに対してメキシコは、のんびりとした「マニャーナの国」であり、民主主義体制と呼べるものは存在しなかったが、PRIの一党独裁体制の下で国政選挙やシ

ベリアン・コントロールが実現し、高い経済成長を達成していた。しかもアルゼンチンは米国の対「キューバ封じ込め」政策に協力していたため、キューバ革命政府と共存を選んだメキシコの方が社会主義諸国にとって魅力的であったに違いない。

### ●おわりに

以上のように、「途上国」であったにもかかわらず、メキシコは五輪の開催を獲得した。メキシコの経済発展と政治的安定が鍵であったが、当時の国際情勢も影響したといえる。また「近代」と「エキゾチック」を統合する構想も魅力的だったであろう。しかし、五輪開催地を獲得したことによって、メキシコの本当の挑戦が始まった。メキシコの指導者は自国が「マニャーナの国」ではなく「先進国」であることをアピールする必要がある。ただし、その後の歴史が証明するように、その過程は困難であった。

前述したように、「メキシコ六八」は無事に開催された。その背景には、メキシコの指導者、COMとIOCの幹部たちの多大な努力があったことは確かである。

しかし、一部の政治家や幹部は自分の名誉と利権を優先し、肝心なメキシコ市民の存在を軽視した。これが学生運動による非難に繋がり、五輪史上初の「途上国」開催の理不尽な部分が浮き彫りとなり、悲劇的な「トラテロルコ虐殺」が起きてしまった。

そう考えると、どうして「途上国」は自国の能力を超えてまで五輪を開催する必要があるのだろうか。この疑問は、今度のリオ五輪に対しても当てはめることができる。五輪開催を前にして、景気の低迷と汚職や統治能力の低下からジルマ・ルセフ大統領の辞任を求める声が高まり、不安定な状況に陥ったブラジルをみると、やはり改めて「メキシコ六八」を考える必要があるかもしれない。

(Tsami Romero / 帯広畜産大学講師)

### 《参考文献》

- ① 池井優『オリンピックの政治学』丸善、一九九二年。
- ② 小倉英敬『ラテンアメリカ一九六八年論』新泉社、二〇一五年。
- ③ エレナ・ポニアトウスカ『トラ

テロルコの夜』藤原書店、二〇〇五年。

- ④ Clarie Brewster and Keith Brewster, *Representing the Nation: Sports and Spectacle in Post-Revolutionary Mexico*, New York: Routledge, 2010.
- ⑤ Keith Brewster ed., *Reflections on Mexico '68*, West Sussex: Wiley-Black Well, 2010.
- ⑥ Ariel Rodriguez Kuri "Ganar la sede. La política internacional de los juegos olímpicos de 1968," *Historia Mexicana*, 44(1): 2014, 243-289
- ⑦ Kevin Witherspoon, *Before the Eyes of the World: Mexico and the 1968 Olympic Games*, Northern Illinois University Press, 2008.